speedgoat

Setup Guide

R2020a and earlier

Ver.1.0.1 2021年12月13日



目次

1	概 要	1
2	構成	1
_	2−1 Host computerとTarget computerの接続	
	2-2 Target computerとTarget screenの接続	
_		
3	納品物の確認	2
4	カスタマーポータルサイト	2
	4-1 アカウントの作成	2
	4-2 アカウントの有効化	2
	4-3 Account Home	4
	4-3-1 Maintenance	5
	4-3-2 Downloads	6
5	開発環境	7
Ŭ	5-1 用意するソフトウェア	
	5-1-1 MathWorks製品	
	5-1-2 Microsoft製品	
	5-1-3 Speedgoat製品	
	5-1-4 Xilinx製品	
	5-2 Speedgoat製品のインストール	9
	5-2-1 Speedgoat I/O Blockset	9
6	ネットワーク設定	10
Ü	6-1 Host computer	
	6-2 Target computer	
	6-2-1 Kernelの書き換え	
	6-2-2 Kernelの書き換え手順	
_		
7	起動	
	7-1 Target computerの起動	
	7-2 Target computerとの接続	
	7-3 Simulinkモデルのこルト	
	7-3-1 オンレーダモテル	
8	Control and Instrumentation	
	8-1 MATLAB	
	8-1-1 起動	
	8-2 Simulink	
	8-3 Simulink Real-time Explorer	
	8-3-1 リアルタイムアプリケーションのロード	
	8-3-2 信号の表示	
	8-3-3 パラメータ設定	
	8-3-4 Host scopeによる信号の表示	
	8-3-5 Target scopeによる信号の表示	
	8-3-6 File scopeによる信号の保存	
	8-4-1 起動	
	O 午 贮刬	ನ /

8-4-2	GUI の 配置	39
	Target computerとの接続	
8-4-4	モデルのビルド	42
8-4-5	リアルタイムアプリケーションのロード	44
8-4-6	リアルタイムアプリケーションの実行	45
8-4-7	信号の表示	46
8-4-8	パラメータの設定	50



1 概要

本書は、Speedgoat 社のリアルタイムターゲットマシンでサンプルモデルを実行するまでの手順について説明します。

2 構成



Host computer	Target computer で実行するリアルタイムアプリケーションを作成します。
	リアルタイムアプリケーションは Simulink モデルから生成されます。
Target computer	Speedgoat 製品のリアルタイムターゲットマシンです。
Target screen	Target computerの BIOS 設定や、OS のブート画面、リアルタイムアプリケー
	ションの実行状況を表示します。

2-1 Host computer と Target computer の接続

付属の Ethernet ケーブルで接続します。

Host computer 側は Ethernet 通信が可能な RJ-45 コネクタを使用します。 Target computer 側は host link と記載された RJ-45 コネクタを使用します。 Mobile Tareget Machine を参考例として示します。



2-2 Target computer と Target screen の接続

使用する Target computer の種類によって使用できるケーブルが異なります。
Target computer の解像度については、それぞれの User Manual をご参照ください。

Perfermance	HDMI, DVI-I, VGA	
Mobile	DVI-I,DisplayPort	
Baseline	DisplayPort	
Unit	DisplayPort	



3 納品物の確認

Speedgoat 製品はターゲットマシンやケーブル、端子台といったハードウェアとライブラリやドキュメントといったソフトウェアで構成されます。

ハードウェアについては弊社からご注文いただいた内容の Speedgoat 製品を納品します。

納品物には納品リストが含まれていますので、内訳はそちらをご確認ください。

ソフトウェアについては Speedgoat 社の Π にあるカスタマーポータルサイトよりダウンロードして入手します。

カスタマーポータルサイトについては後述します。

4 カスタマーポータルサイト

カスタマーポータルサイトでは Speedgoat I/O Blockset やサンプルモデルといったソフトウェア、それらの取扱説明書のダウンロードや購入した製品ハードウェアの保守期間やソフトウェアメンテナンス期間を閲覧できるサービスを提供します。

https://www.speedgoat.com/extranet#/Login

4-1 アカウントの作成

カスタマーポータルサイトを利用するためにはSpeedgoat社へアカウント作成の依頼をする必要があります。 ただし、注文いただいたユーザのアカウントは納品前後に作成されております。

それ以外のユーザのアカウントを作成する場合は、弊社のサポートや営業、もしくはカスタマーポータルサイト で依頼することになります。

4-2 アカウントの有効化

アカウント作成が完了後、それを有効化することでカスタマーポータルサイトへログインすることができます。

有効化するためには下記 URL ヘアクセスしてください。

https://www.speedgoat.com/extranet#/Login/ActivateAccount

アクセスすると下図のような画面が表示されますので、アカウント作成時に連絡しているメールアドレスを入力します。

Activate your Account

Enter your email address and click Submit. We will send you and email that includes a link to create your password.

Email Address *

Submit

メールアドレスを入力すると、そのメールアドレス宛に下記内容のメールが届きます。

Please create your password by clicking here: Activate your Account

Please note that this token/link is only valid for 30 minutes. If your token has expired, please request a new one on www.speedgoat.ch/login

Your Speedgoat Team



メールに記載されたリンク「Activate your Account」を選択すると、パスワードを設定する画面が表示されます。

Sei your rassword
new Password *
Passwords must be at least 8 characters long including letter, numerical digit and a special character
Confirm Password *
Submit

パスワードの設定が完了後、メールの「www. speedgoat. ch/login」を選択して下図のログイン画面を開きます。

Customer Log In	
The customer area gives access to:	
Details of your purchased systems Renewal of hardware warranty and software maintenance plans Download the latest drivers, software and documentation	
Email Address *	
Password *	
Login Forget your password?	

ログイン画面でメールアドレスとパスワードを入力すると、カスタマーポータルヘログインできます。



4-3 Account Home

ログイン後に表示される Account Home 画面が下図になります。



Maintenance

View and renew your maintenance



Downloads

Download drivers, software and documentation



Learning Tutorials

Introduction to Simulink Real-Time



Documentation

Documentation for the Speedgoat Library for Simulink Real-Time and HDL Coder



Your Company Profile

Edit your company's address



My Profile

Edit your name and change password



User

Add, view and edit the accounts of your company's users



Log out

Log out of the customer area

Maintenance	ハードウェアの保守期間やソフトウェアメンテナンス期間の確認ができます。
Downloads	ライブラリやサンプルモデル、ドキュメントのダウンロードができます。
Learning Tutorials	基本的な操作方法を紹介した動画が閲覧できます。
Documentation	Speedgoat I/O Blockset などの説明が記載されています。
Your Company Profile	アカウントユーザが所属する組織情報が記載されています。
My Profile	アカウントユーザの情報が記載されています。
Users	組織に所属しているユーザー覧が記載されています。
Log out	ポータルサイトからログアウトします。

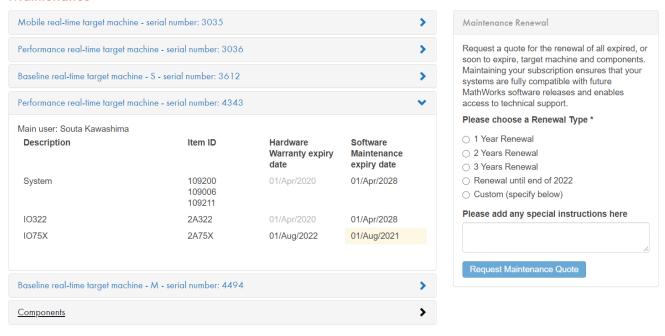


4-3-1 Maintenance

Account HomeでMaintenanceを選択すると表示されます。

購入した製品の情報が表示されます。

Maintenance



Hardware Warranty expiry date ハードウェアの保守期間です。
Software Maintenance expiry date ソフトウェアのメンテナンス期間です。



4-3-2 Downloads

Account HomeでDownloadsを選択すると表示されます。

Downloads

Speedgoat I/O Blockset

Installation instructions:

- 1. Download the library for your MATLAB release
- 2. Extract the downloaded ZIP file into a temporary folder
- 3. In MATLAB, navigate to the extracted folder which contains speedgoat_setup.p (do not add any folder to the MATLAB path)
- 4. Right click on the speedgoat_setup.p and select Run
- 5. Follow the instructions
- 6. Restart MATLAB

Important Note: Migration of existing hardware to new R2020b release

Speedgoat I/O Blockset for R2018b (v9.2.0)

Speedgoat I/O Blockset for R2019a (v9.2.0)

Speedgoat I/O Blockset for R2019b (v9.2.0)

Speedgoat I/O Blockset for R2020a (v9.2.0)

Speedgoat I/O Blockset for R2020b (v9.2.0)

Speedgoat I/O Blockset for R2021a (v9.2.0)

Speedgoat I/O Blockset Release Notes

主要なソフトウェアとドキュメントについて下表に記載します。

Speedgoat I/O Blockset	Speedgoat の I/0 ライブラリです。
Configuration and	サンプルモデルの説明書です。
Testing Information	
Simulink Test Model	サンプルモデルです。
Custom Implementation	FPGA モジュールの bitstream です。
HDL Coder Integration	HDL Coder 用 Speedgoat のライブラリです。
Package	

- ※ソフトウェアやドキュメントの名称は、通知なく変更される場合がございますのでご了承ください。
- ※ソフトウェアの中にはオプション品も含まれ、購入していないと表示されないものがあります。

ソフトウェアメンテナンス期間内の間は最新の Speedgoat I/O Blockset と HDL Coder Integration Package を提供しております。



5 開発環境

5-1 用意するソフトウェア

5-1-1 MathWorks 製品

Simulinkモデルでアプリケーションを作成するために必要なMathWorks製品ソフトウェアを下表に示します。

MathWorks製品
MATLAB
Simulink
MATLAB Coder
Simulink Coder
Simulink Real-time
HDL Coder*
Fixed Point Designer*

^{*}HDL Coder Integration Package使用時のみ必要

これらの製品は MathWorks 社からインストーラをダウンロードし、インストールします。

5-1-2 Microsoft 製品

Simulink モデルでアプリケーションを作成するためには Microsoft 社の Visual Studio (コンパイラ) が必要となります。

また MATLAB のバージョンによって必要な Visual Studio のバージョンも異なります。

下記 URL の「Supported Compliers」を選択すると、各 MATLAB バージョンに必要な Visual Studio の情報が表示されます。

https://jp.mathworks.com/support/requirements/previous-releases.html

使用する MathWorks 製品に対応した Visual Studio をインストールします。

MATLAB Product Family – Release 2020a									
	MATLAB	MATLAB Coder	GPU Coder	SimBiology	Fixed Point Designer	HDL Coder	HDL Verifier	Audio Toolbox	ROS Toolbox
Compiler	For MEX-file compilation, loadlibrary, and external usage of MATLAB Engine and MAT-file APIs	For all features	For all features	For accelerated computation	For accelerated computation	For accelerated testbench simulation	For DPI and TLM component generation	For validating and generating audio plugins	For ROS 2 custom messages and code generation
MinGW 6.3 C/C++ (Distributor: mingw-w64)	<	<		<	<	<	<		
Download Now									
Available at no charge									
Microsoft Visual C++ 2019 product family	Update 3	Update 5	Update 5	Update 5				Update 5	
Microsoft Visual C++ 2017 product family ¹¹	<	<		<	<		<	<	<
Microsoft Visual C++ 2015 Professional ¹⁰	<	<	<	<	<	<	<	ॐ 1	



5-1-3 Speedgoat 製品

Simulinkモデルでアプリケーションを作成する場合は下記ふたつのソフトウェアをカスタマーポータルサイトよりダウンロードします。

どちらもMATLABのバージョンごとに用意されております。

- · Speedgoat I/O Blockset
- ・Speedgoat HDL Coder Integration Package (HDL Coder使用時のみ必要)

※Speedgoat I/O Blocksetは最新Verから数えて6リリース前のMALTABまでをサポートします。

5-1-4 Xilinx 製品

HDL Coderを使用する場合はXilinxの統合開発環境Vivadoが必要なります。 詳細は下記URLをご参照ください。

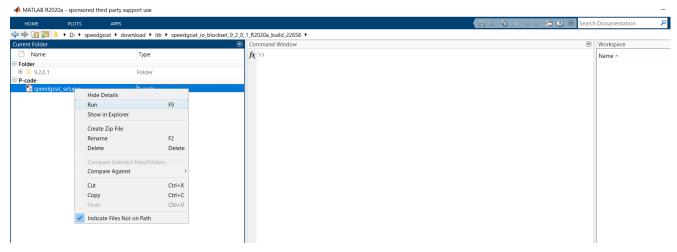
https://www.speedgoat.com/help/hdlcoder/page/refentry_workflow



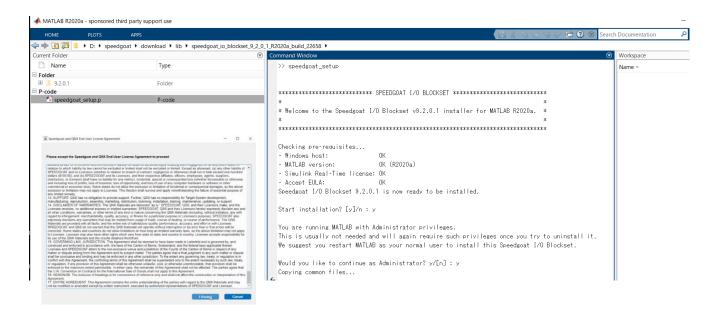
5-2 Speedgoat 製品のインストール

5-2-1 Speedgoat I/O Blockset

カスタマーポータルからダウンロードした Speedgoat I/O Blockset は zip ファイルとなります。 それを任意のフォルダに解凍し、そのフォルダを MATLAB の Current Folder にします。 解凍したフォルダに格納されている speedgoat_setup.p を実行します。



インストールが開始されますので、表示される使用許諾契約をよく読み、許諾を選択します。



問題なければ、そのまま Speedgoat I/O Blockset のインストールは完了します。

MATLAB の Command Window に speedgoat. version と入力すると、現在インストールされているバージョンを確認できます。



6 ネットワーク設定

Host computer と Target computer で Ethernet 通信するためにネットワークの設定をする必要があります。



- ・アプリケーションのロード、実行指示
- アプリケーションのパラメータ設定
- ・通信テストやリブート指示





- ・データのロギングやストリーミング
- ステータスの通知

Target computer の出荷時のネットワーク設定は以下のとおりです。

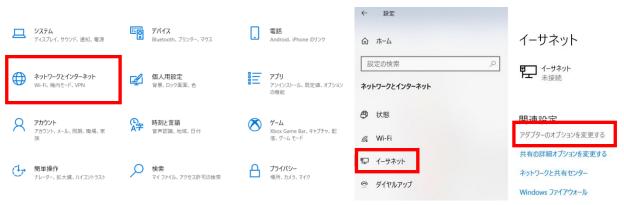
IP Address	192. 168. 7. 1
Subnet mask	255. 255. 255. 0

6-1 Host computer

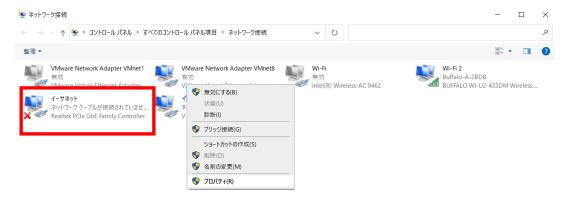
下記の項目から Host computer の設定を変更することができます。

PC の設定 > ネットワークとインターネット > イーサネット > アダプターのオプションを変更する



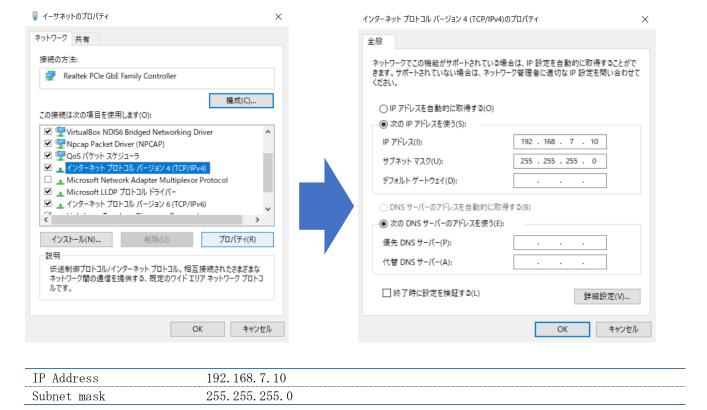


使用するネットワークカード(ネットワークアダプタ)を右クリックし、プロパティを選択します。 下図の例では最も左下の項目が使用するネットワークカードとなります。





インターネットプロトコルバージョン 4(TCP/IPv4)をクリックした後、プロパティをクリックします。 下図はデフォルト設定の Target computer と接続できる設定となります。



6-2 Target computer

Target computer のネットワーク設定は、後述する Kernel の書き換えで変更することができます。 Target computer を起動し、ブートすると Kernel などのバージョン情報が表示されます。

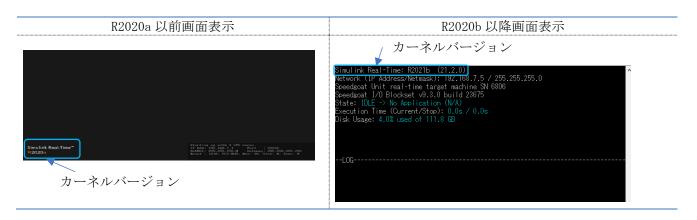


6-2-1 Kernel の書き換え

Host Computer と Target Computer で MATLAB や Speedgoat I/O Blockset のバージョンが異なると、うまく通信ができません。この場合 Target Computer の Kernel を書き換える必要があります。 以下に Kernel の書き換え方法について説明します。

※Target Computer のカーネルバージョンが R2020b 以降の場合は、Target Computer を R2020a 以前のカーネル を読み込める状態に設定する必要があります。

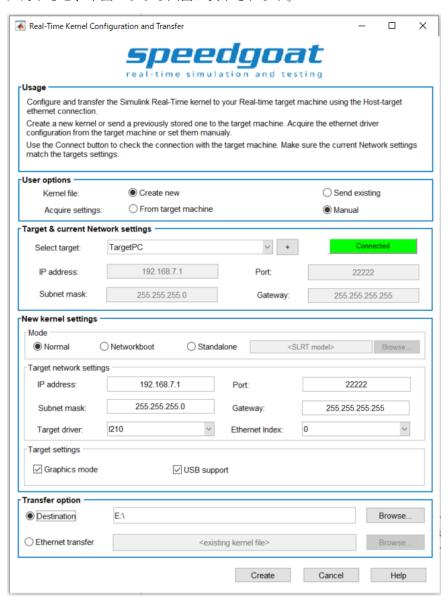
Target Computer のカーネルバージョンの確認方法は、Target Computer 起動後の画面から確認可能です。



「6-2-2Kernelの書き換え手順」も併せてご参照ください。



MATLAB の Command Window 上で speedgoat. kernelTransfer と入力します。 入力すると、下図のような画面が表示されます。



Kernel を書き換える方法はいくつかありますが、今回は最も基本的な USB メモリによる Kernel の書き換えについて説明します。

- ・USB メモリを Host Computer へ挿入します。
- Transfer option の欄で Destination をチェックし、認識した USB メモリのフォルダパスを入力します。
- ・Create をクリックし、USB メモリの最上フォルダ (E:¥ 等) へ Kernel が作成されることを確認します。
- ・USB メモリをターゲットマシンへ挿入し、電源を ON にすると Kernel がロードされます。
- ・Kernel のロードを確認後、電源を OFF にし、USB メモリを抜去後に電源を ON にします。
- ・新しくロードした Kernel でブートすることを確認します。

※設定項目については次頁で説明します。



Usage Options	の情報を新規作成するか、別の方法で作成するのか選択しま					
	す。基本的には	新規作成をすることをお勧めしますので、"Create new"と				
	"Manual"を指	定します。				
Target & current	USB メモリではなくネットワーク通信で書き換える場合、設定します。					
Network settings	設定する場合は Target Computer のネットワーク設定を入力します。					
New kernel settings	Target compute	r へ書き込む Kernel の設定を入力します。				
	Mode					
	Normal	後述するTransfer optionで選択した方法でKernelを書き換				
		えます。本紙の方法ではこれを選択します。				
	Networkboot	Host computerのネットワーク設定を変更できない環境で、				
		ネットワークからKernelを書き換えるときに選択します。				
	Standalone	基本的にはNormalと同様ですが、Kernelとともに*1リアル				
		タイムアプリケーション*1を書き込みます。書き込まれた				
		リアルタイムアプリケーションはTarget computer起動時に				
	自動で実行されます。					

Target network	settings		
IP address	Target computerに設定するIPアドレスを入力します。		
Port	Target computerに設定するPort番号を入力します。		
	特に指定がなければ22222と入力します。		
Subnet mask	Target computerに設定するSubnet maskを入力します。		
Gateway	Target computerに設定するGatewayを入力します。		
Target driver	Target computerに設定するTarget driverを入力します。		
	この項目はTaret computerの種類によって決まります。		
Ethenet Index	Target computerに設定するEthernet Indexを入力します。		
	この項目はTaret computerの種類によって決まります。		

Target network	settings		
Graphics mode	Target Screen上の表示を変更します。		
	チェックを外すことで、グラフ表示などができなくなりま		
	すが、処理が若干軽くなります。		
USB support	チェックを外すことでUSB WebカメラなどのUSB機器が使用できなくなりますが、処理が若干軽くなります。		
	できなくなりますが、処理が若干軽くなります。		

Transfer option

作成した Kernel の保存場所を指定します。

Destination を選択した場合、Host computer 上に Kernel を保存します。 通常は USB メモリに保存し、それを使用して Kernel の書き換えを行います。 Ethernet transfer を選択した場合、ネットワーク経由で Target computer へ Kernel を直接書き込みます。この場合、Target & current Network settings であらかじめ Target computer とネットワーク接続している必要があります。

*1 リアルアイムアプリケーションは Target computer で実行されるファイルです。

Target driver と Ethernet Index は Target computer の種類によって異なりますので、下表を参考に適切な値を設定してください。

Target driver	Performance (4.2GHz)	I217/9	
	Performance(3.5GHz), Mobile	Intel 8254x	
	Baseline系、Unit	I210	
Ethernet Index	Performance (4.2GHz)	0	
	Performance(3.5GHz), Mobile	0	
	Unit	0	
	Baseline系	3	

※Ethernet Index は I0791 などネットワーク通信系の IO モジュールが搭載されている場合、変動することがあります。正しい値は Target computer 本体にラベリングされていますので、それを確認してください。



6-2-2 Kernel の書き換え手順

USB メモリによる Kernel の書き換え手順は下記となります。

Target Computer の Kernel が 2020b 以降の場合は手順1から実施します。

Target Computer の Kernel が 2020a 以前の場合は手順5から実施します。

1. speedgoat Target Software Migration とプリントされている USB メモリ(以後 speedgoat USB メモリ)を使用します。

speedgoat ターゲットマシンご購入時の付属品です。

※kernelTransfer でカーネルファイルを格納する USB メモリとは別のものになります。



speedgoat USBメモリには 2020b 以降の Kernel の情報が入っています。

speedgoat USB で R2020a以前のバージョンを読み込めるように設定するため、speedgoat USB をターゲットマシンでブート起動します。

2. ブートに成功すると、下図画面が表示されるので、Enter キーを押します。

3. 下図画面が表示されるので、「3」を入力して Enter キーを押します。



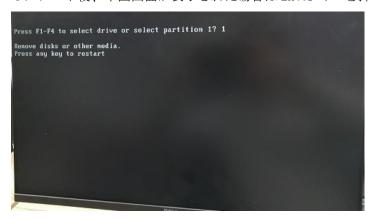
4. 下図画面が表示されるので、Speedgoat USBメモリを抜きます。

```
Reverting to R2020a and earlier
Formatting disk...
Setting up the image file system ...
Format complete: FAT32 (4096-byte clusters), 234109392 kB available.
Format complete: FAT32 (4096-byte clusters), 12348856 kB available.
Finalizing the installation ...
1+8 records in
1+8 records out
78-1 records in
78-1 records out

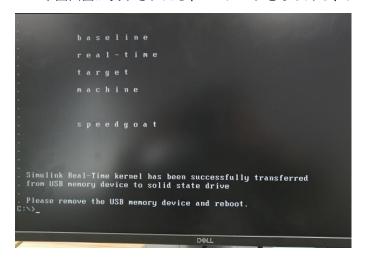
Revert Installation Complete!

Remove the USB drive and press Enter to reboot.
```

- 5. 「6-2-1 Kernel の書き換え」で作成した 2020a 以前のカーネル 0S が入った USB メモリを挿入し、再起動してターゲットマシンでブート起動します。
- 6. ブート後、下図画面が表示された場合は Enter キーを押します。



7. 下図画面が表示されたら、USBメモリを取り外し、ターゲットマシンを再起動します。





8. 再起動後、画面に Simulink Real-Time バージョンと IP アドレス等のネットワーク情報が表示されれば完了です。



※画面に Simulink Real-Time バージョンのみ表示される場合は、「6-2-1 Kernel の書き換え」の Target driver または Ethernet Index の設定に誤りがある場合があります。



7 起動

7-1 Target computer の起動

Target computer へ電源を投入します。

Target computer は起動すると、BIOS > OS の順でブートします。

OS の Boot に成功すると、Target screen 上にネットワークなどの各種情報が表示されます。



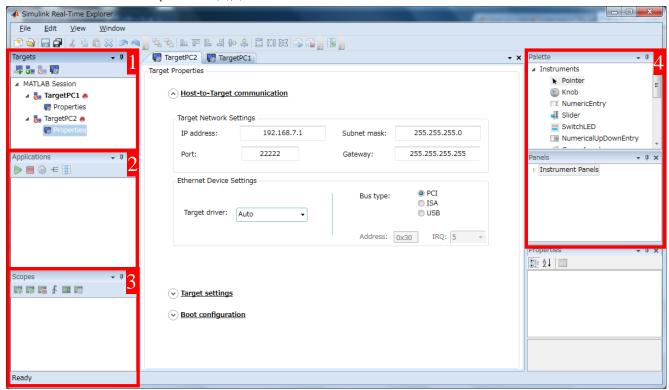


7-2 Target computer との接続

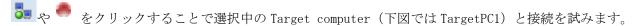
Host computer から Target computer 〜接続確認を行います。 接続確認は MATLAB の Simulink Real-time Explorer から行います。 MATLAB の Command Window で slrtexplr と入力します。

Command Window fx → slrtexplr

・Simulink Real-time Explorerの画面



- 1 接続する Target computer の設定や接続後の Target computer に対してのリアルタイムアプリケーションのロードや Target computer のファイルシステムへのアクセスなどが行えます。
- 2 Target computer ヘロードしたリアルタイムアプリケーションの実行や停止、パラメータや信号の確認や変更を行うことができます。
- 3 Simulink モデル上の信号をグラフ表示することができます。
- 4 用意されたパーツを配置し、GUI を作成することができます。 作成した GUI に Simulink モデル上のパラメータや信号をリンクさせることで値の表示や変更が可能です。





接続に成功すると、Target computer のボタン がっへ変化します。



7-3 Simulink モデルのビルド

カスタマーポータルサイトからダウンロードしたサンプルモデルをビルドし、リアルタイムアプリケーション を生成します。

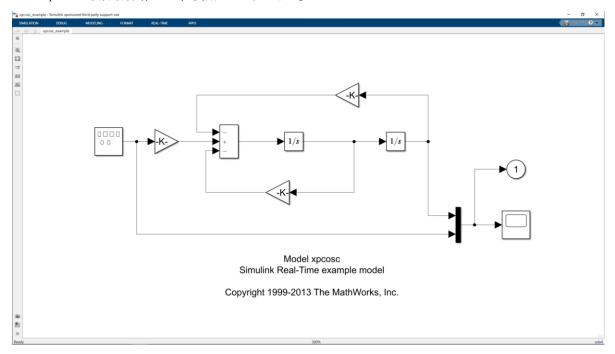
本項では Simulink I/O Blockset を使用していないオシレータモデルをビルドする方法を説明します。

7-3-1 オシレータモデル

MATLAB の Command Window で xpcosc と入力します。

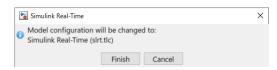
入力すると Simulink 上でオシレータモデル(モデル名: xpcosc)が開かれます。

この xpcosc を別名保存して、使用してください。



Simulation > Run をクリックすると Host computer 上でオシレータモデルをシミュレーション実行します。 次に APPS > Simulink Real-time をクリックすると、モデルが Simulink Real-time 用のテンプレートファイル を使用する設定になります。





Configuration Parameters で変更されたテンプレートファイルを確認することができます。



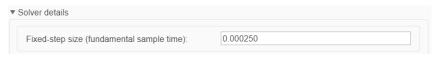
※ただし xpcosc の初期設定で Simlink Real-time 用の設定となっております。



Configuration Parameters の Stop time を inf にした後ビルドすることで、Host computer から停止を指令するまでリアルタイムアプリケーションを実行します。この設定を行った前提で、以降の説明を行います。



この画面ではモデルの動作周期なども変更することができます。

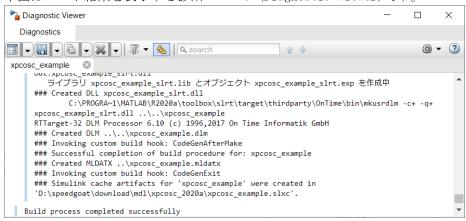


Run on Target をクリックすると、Simulink モデルをビルドし、Target computer で実行することができる リアルタイムアプリケーションを生成します。

下図は R2020a の画面ですが、バージョンによって表示内容が多少異なります。



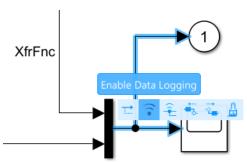
下図はビルド結果を表示する診断ビューア(Diagnostic Viewer)です。

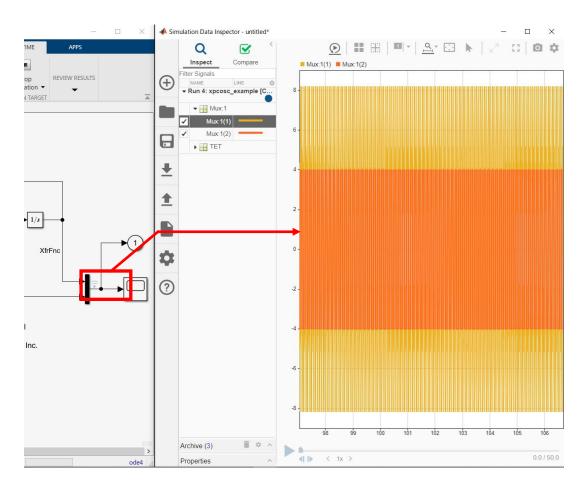




Data Inspector をクリックすると、Simulation Data Inspector が起動し、ロギング設定している信号線のデータを表示します。

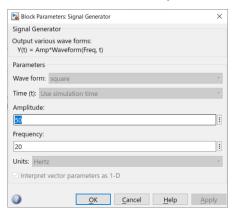
信号線を選択後に表示されるプロパティから「Enable Data Logging」を選択し、ビルドすることでその信号線をロギングすることができます。



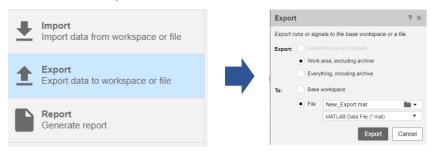




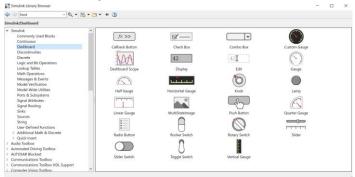
リアルタイムアプリケーションを実行中に、ブロックのパラメータを変更することで、Target computer 上のパラメータも変更されます。これにより、ロギング中のデータには変化が生じます。



Simulation Data Inspector ではロギングしたデータをファイル保存する機能もありますので、必要に応じて使用してください。



Simulink の Dashboard を使用することでも、信号やパラメータの表示や変更が可能ですので、必要に応じて使用してください。





7-3-2 サンプルモデル

Speedgoat の Target computer (Real-time target machine)を購入いただいたユーザのポータルサイトではサンプルモデルとその説明書 (Configuration and Testing Information) がダウンロードできます。

System

Configuration and Testing Information Simulink Test Model

※ユーザごとに説明書の名称(例: Technical Reference Manual)が異なっておりますのでご注意ください。

サンプルモデルを実行するためにはダウンロードした説明書に記載されたとおりに準備をします。 基本的には以下のような流れになります。

- ・サンプルモデルを任意のフォルダに格納し、MATLAB上でそのフォルダを Current Folder にした後、サンプルモデル(.slx)を開きます。
- ・Target computer と Terminal board (端子台) をケーブルで接続します。 Terminal board とケーブルは Target computer に同梱しております。
- ・オシレータモデルと同様にビルド、ロード、実行を行います。
- ・Target Screen 上で正常に信号データが表示されることを確認します。





8 Control and Instrumentation

Target computer で実行しているモデル (リアルタイムアプリケーション) のブロックパラメータを設定したり、信号のデータを表示したりする方法は複数あります。

- MATLAB
- Simulink
- Simulink Real-time Explorer
- App Designer

本章では、これらの使用方法について説明します。

8-1 MATLAB

MATLAB ではコマンドウィンドウを使用して Target computer のパラメータや信号データへアクセスすることができます。

コマンドウィンドウ上で下記のように入力すると、Target computer の情報が tg に格納され、以降 tg を使用して Target computer を制御することができます。

>>tg=s1rt

8-1-1 起動

下記コマンド群でモデルのビルド、Target computer にアプリケーションをロードすることや、開始・停止することを指示することができます。

- >>rtwbuild('ModelName')
- >>tg.load('ModelName')
- >>tg. start
- >>tg. stop

詳しくはSimulink Real-time のヘルプを参照してください。



8-2 Simulink

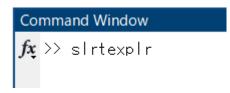
Simulink での操作方法は前章で説明しましたので、そちらをご参照ください。 これが最も簡単な操作方法となります。



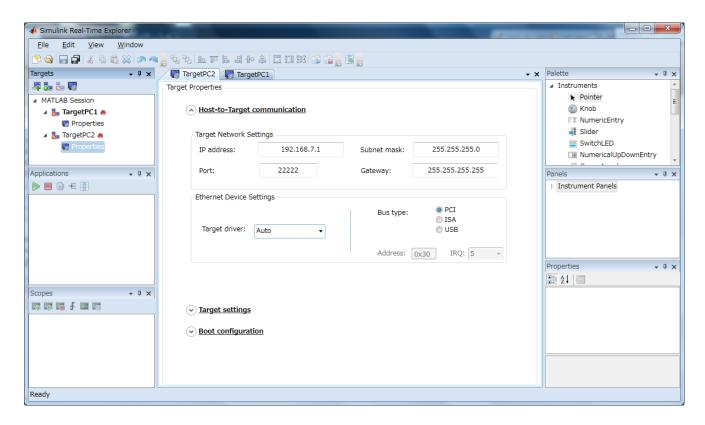
8-3 Simulink Real-time Explorer

Simulink Real-time Explorer での操作方法を説明します。

MATLAB のコマンドウィンドウで下記コマンドを実行することで Simulink Real-time Explorer が起動します。



起動後の画面を下図に示します。

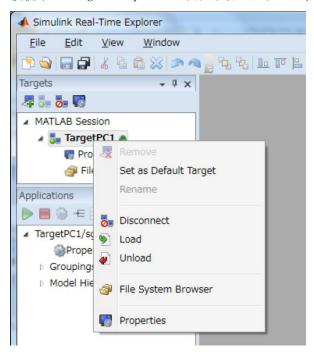


Target Computer との接続までは7章で説明しておりますので、そちらをご覧ください。 本項ではリアルタイムアプリケーションのロードから、パラメータの設定や信号の確認方法について説明します。



8-3-1 リアルタイムアプリケーションのロード

接続中の Target computer の項目を右クリックし、Load を選択します。



Browse... ボタンでロードしたいリアルタイムアプリケーションを選択し、OK ボタンをクリックします。



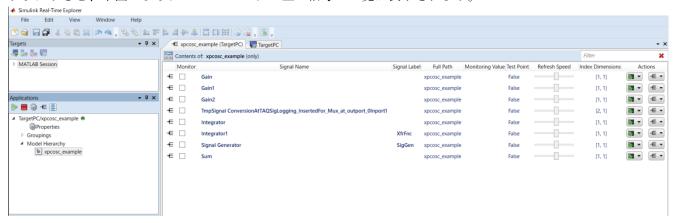
ロードが成功した後、Applications にロードしたリアルタイムアプリケーションの名称が表示されます。 Start ボタンを押すことで Target computer でリアルタイムアプリケーションが実行されます。





8-3-2 信号の表示

Applications の Model Hierarchy で信号を表示したいモデル階層を選択した後、View Signals ボタン をクリックすると、下図のように Simulink モデル上の信号の一覧が表示されます。

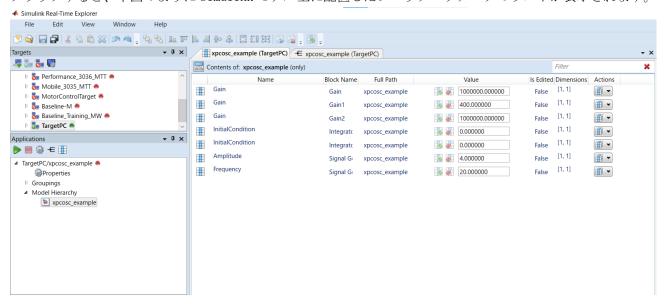


信号を監視するためには、監視する信号の Monitor 列のチェックボックスにチェックを入れます。 チェックを入れることによって Monitoring Value 列に信号のデータが表示されます。 Refresh Speed を変更することで、データの更新周期を変更できます。



8-3-3 パラメータ設定

Applications の Model Hierarchy で信号を表示したいモデル階層を選択した後、View Parameters ボタン を クリックすると、下図のように Simulink モデル上に配置したブロックパラメータのリストが表示されます。



パラメータリストから変更したいパラメータを見つけ、下方向矢印をクリックします。

Value には、現在設定されているパラメータ値が表示されます。

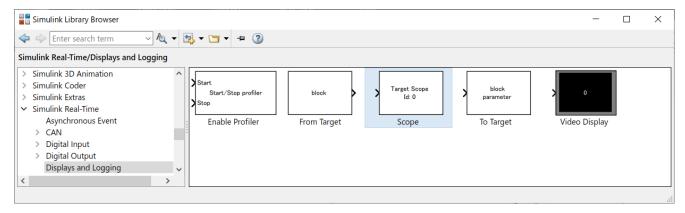
パラメータを変更するには、Value に変更するパラメータ値を入力し、Apply parameter value(s) changes ボタン \mathbb{R} をクリックします。これによりパラメータ値が変更されます。

パラメータ値を以前の値に戻すには、Revert ボタン をクリックします。

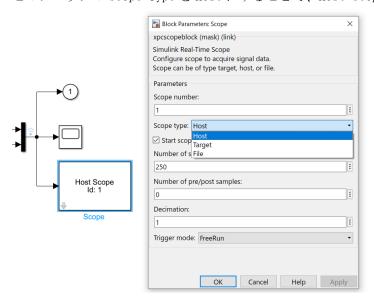


8-3-4 Host scope による信号の表示

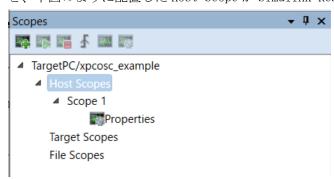
Host Scope は Simulink モデルの信号を Simulink Real-time Explorer 上にグラフ表示するために使用します。Host Scope は Simulink ブロック Scope として提供されております。



このブロックの Scope Type を Host にすることで、Host Scope として機能します。

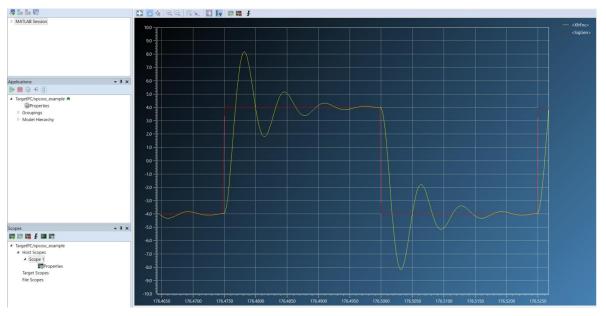


Host Scope を配置した Simulink モデルをビルドし、生成されたリアルタイムアプリケーションをロードすると、下図のように配置した Host Scope が Simulink Real-time Explorer 上に表示されます。





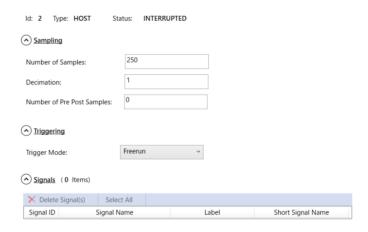
表示したい Host Scope にアクティブにした後、View Host Scope ボタン をクリックすることで、グラフが表示されます。



また Add Host Scope によって、Host Scope を新規に追加することができます。



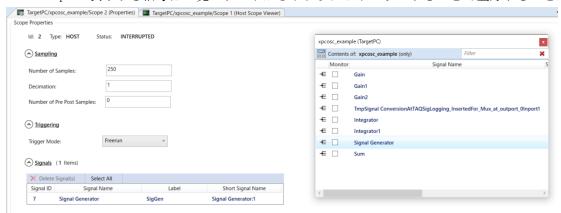
Host Scope を追加後、下記の画面で表示内容を設定します。



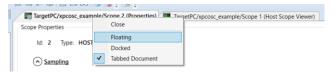
Sampling と Triggering の項目は Simulink ブロックで設定する項目と同様です。 項目の詳細についてはブロックのヘルプを参照してください。



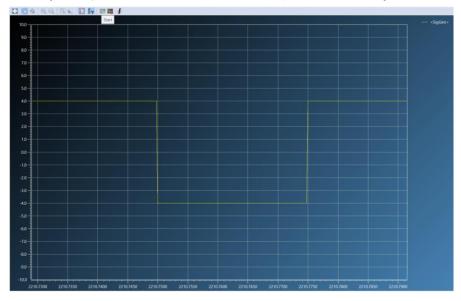
Host Scope へ表示する信号は一覧のリストからドラッグ&ドロップすることで登録することができます。



※Simulink Real-time Explorer のタブは右クリックすることでフロート表示にすることができます。



新規作成した Host Scope にアクティブにした後、View Host Scope ボタン をクリックしてグラフを表示させます。その後 Start ボタンを押すことで信号が表示されます。

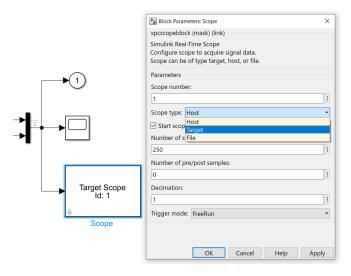




8-3-5 Target scope による信号の表示

Target Scope は Simulink モデルの信号を Target Screen 上にグラフ表示するために使用します。 Target Scope は Simulink ブロック Scope として提供されております。

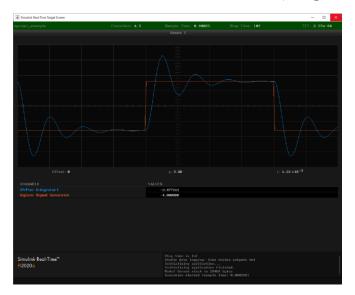
Scope Typeを Target にすることで Target Scope として機能します。



Target Scope を配置した Simulink モデルをビルドし、生成されたリアルタイムアプリケーションをロードすると、下図のように配置した Target Scope が Simulink Real-time Explorer 上に表示されます。



リアルタイムアプリケーションを実行すると、Target Screen 上に Target Scope が表示されます。



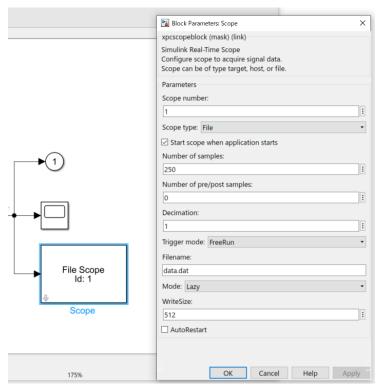
Target Scope の追加方法については Host Scope と同様です。



8-3-6 File scope による信号の保存

File Scope は Simulink モデルの信号を Target computer にファイル保存するために使用します。File Scope は Simulink ブロック Scope として提供されております。

Scope Type を File にすることで File Scope として機能します。

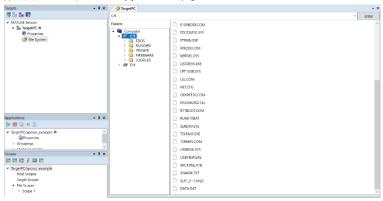


File Scope を配置した Simulink モデルをビルドし、生成されたリアルタイムアプリケーションをロードすると、下図のように配置した File Scope が Simulink Real-time Explorer 上に表示されます。





リアルタイムアプリケーションを実行して停止すると、Target computer の C ドライブ直下にファイルが作成されます。今回は File Scope のブロック設定で Filename を data. dat と設定したので、下図で DATA. DAT が作成されていることが分かります。



Target computer と接続した状態のまま、MATLAB のコマンドウィンドウで下記コマンドを入力すると、data.dat ファイルを Host computer へ転送することができます。

tg=s1rt;

f=SimulinkRealTime.openFTP(tg);

mget(f, 'data.dat');

close(f);

下記コマンドを実行すると、転送した data. dat ファイルを Workspace へ展開することができます。matlab_data = SimulinkRealTime. utils. getFileScopeData('data. dat')



8-4 App Designer

App Designer では GUI の作成と、その GUI で Target computer を制御することができます。

本章では App Designer で作成した GUI アプリケーションを使用して、Target computer ヘモデル xpcosc をロード、実行する手順について説明します。

※本章の手順は xpcosc. slx が MATLAB の Current Folder に存在する状態で行ってください。

8-4-1 起動

MATLAB のコマンドウィンドウで下記コマンドを入力します。

>>appdesigner

新規作成するアプリケーションの種類を選ぶことができるので、用途に合わせて選択します。 今回は Blank App を選択します。

アプリケーションは xpcosc. slx と同じフォルダに作成します。 ファイル名は任意の名称 (xpcosc_app. mlapp 等) を入力します。

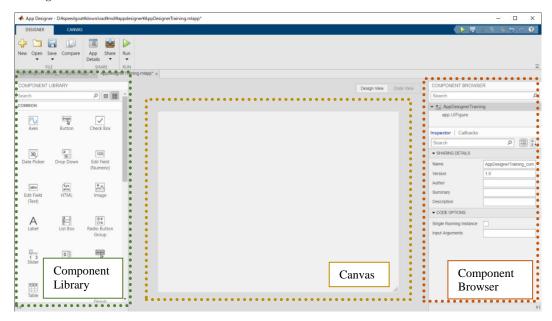
▼ New



下図が App Designer の画面となります。

App Designer はアプリケーションの GUI の配置や設定を行う Design view とアプリケーションの挙動をコーディングするする Code View という二つの画面で構成されます。

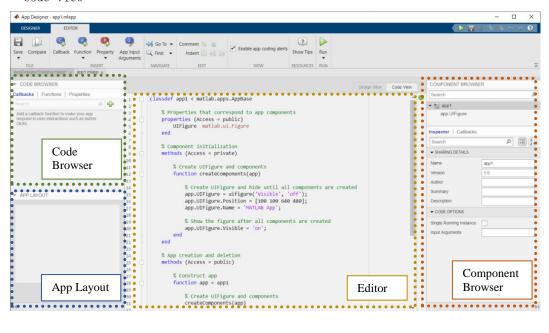
· Design view



Component Library	Canvas に配置できる GUI の部品です。
Component Browser	Canvas に配置した各 GUI の部品のプロパティやコールバックを設定します。
Canvas	GUI を配置するアプリケーションの画面です。



· Code view



Code Browser	Editor で作成した関数などが一覧表示されます。
Component Browser	Canvas に配置した各 GUI の部品のプロパティやコールバックを設定します。
App Layout	Design ViewのCanvasが縮小表示されます。
Editor	アプリケーションのコードを編集します。

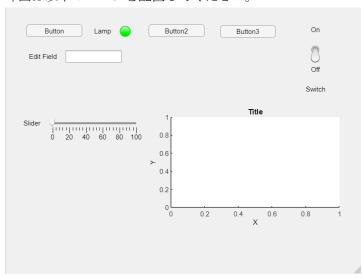


8-4-2 GUI の配置

Component Library から配置したい部品を Canvas ヘドラッグ&ドロップします。



今回は以下のパーツを配置してください。



Button x3	Target computer と接続をするための Button
	モデル xpcosc. slx をビルドするための Button
	Target computerへxpcoscのアプリケーションロードするためのButton
Lamp	Target computerとの接続状態を示すLamp
Edit Field(Text)	Target computerとのあらゆる状態を示すEdit Field(Text)
Toggle Switch	Target computerヘロードしたアプリケーションを実行開始/停止するSwitch
Slider	Signal Generator のパラメータ Amplitude を設定するための Slider
Axes	信号 MuxOut を表示するための Axes

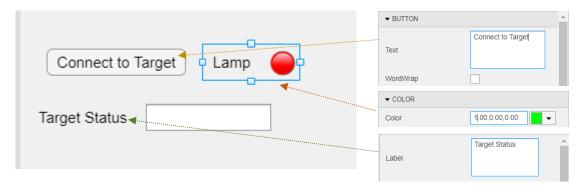
パーツを配置するごとに Component Browser 上でパーツに対応する変数が作成されます。



8-4-3 Target computer との接続

まずは接続に使用する Button と Edit Field の Text や Lamp の初期の色を変更します。

変更するには各パーツを選択後 (アクティブにした後)、Component Browser に表示される設定を変更します。

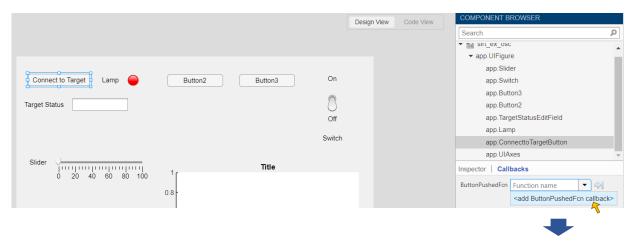


また Component Browser の設定を変更することで Code Browser 上の各パーツに対応する変数の名称も自動的に変更されます。

Connect to Target ボタンを押したときに Target computer と接続するように callback function (コールバック関数)を設定します。

Connect to Target ボタンを選択後、Component Browser の Callbacks でコールバックのイベントを選択します。

ボタンの場合は、ButtonPushedFcn というコールバックのイベントが用意されています。 これを選択すると、Code View上でコールバック関数が作成されます。



% Button pushed function: ConnecttotargetButton function ConnecttotargetButtonPushed(app, event)

end



次にプライベート変数を作成します。

このプライベート変数に Target computer の情報を格納します。

Code BrowserのProperty > Private Propertyを選択します。

選択するとプライベート変数が作成されます。



分かりやすいように変数名を変更し、コメントを追加しておきます。

```
properties (Access = private)
   tg % Target Object
end
```

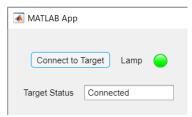
コールバック関数 ConnecttoTargetButtonPushed に Target computer との接続するためのコードを追加します。

```
\% Button pushed function: ConnecttoTargetButton
function ConnecttoTargetButtonPushed(app, event)
    app.TargetStatusEditField.Value = 'Connecting to target...';
    % Get default target settings
    app.tg = slrt;
        % Check if the target is correctly connected and if yes, change color of lamp to green
        if app.tg.Connected
            app.Lamp.Color = [0,1,0];
            app.TargetStatusEditField.Value = 'Connected';
            app.Lamp.Color = [1,0,0];
            app.TargetStatusEditField.Value = 'Connection failed!';
    catch E
        app.Lamp.Color = [1,0,0];
        app.TargetStatusEditField.Value = 'Connection failed!';
    end
end
```

コードを入力し終えたら、Run ボタンでアプリケーションを実行します。



Connect to Target ボタンを押して、正常に Target computer と接続できた場合、下記のように表示されます。



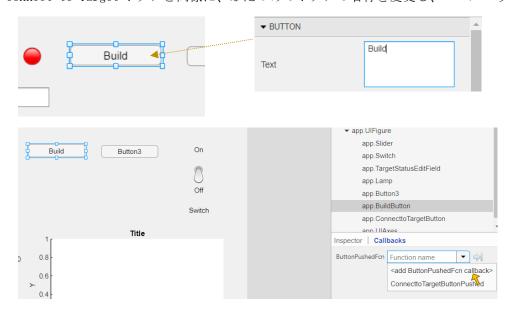
※もし接続できない場合はSimulink Real-time Explorer 上で接続できることを確認してください。 Simulink Real-time Explorer でも接続できない場合はネットワーク設定などApp Designer 以外に問題があります。



8-4-4 モデルのビルド

ふたつめのボタンでモデル xpcosc. slx をビルドできるようにします。

Connect to Target ボタンと同様に、ふたつめのボタンの名称を変更し、コールバック関数を作成します。



またビルドするモデルの名称を格納するプライベート変数を作成します。 変数宣言時にモデルの名称も入力します。

```
properties (Access = private)
  tg % Target Object
  modelName = 'xpcosc' % Name of the Simulink model
```

※モデル名称を変更している場合は、変更後の名称を入力します。

作成されたコールバック関数 BuildButtonPushed にビルドを実行するためのコードを追加します。



コードの入力が完了したら xpcosc.slx を Simulink で開き、Configuration Parameters の Stop time を inf にしておいてください。これは後にモデルのパラメータの設定や信号の確認をするためです。



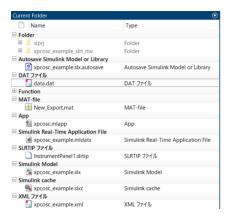
Run ボタンでアプリを起動して正常にビルドできた場合、下記のように表示されます。



MATLAB のコマンドウィンドウ上でもビルドの様子を確認することができます。

D:\/pspeedgoat\/download\/md|\/yxpcosc_2020a\/yxpcosc_2020a\/yxpcosc_example_s|rt_rtw\/instrumented\/set "VSCMD_START_DIR=D:\/yspeedgoat\/download\/md|\/yxpcosc_2020a\/yxpcosc_2020a\/yxpcosc_example_s|rt_rtw\/instrum D:¥speedgoat¥download¥mdl¥xpcosc_2020a¥xpcosc_example_sIrt_rtw¥instrumented>call "C:¥Program Files (x86)¥Microsoft Visual Studio¥2017¥Professional¥VC¥Auxiliary¥Build¥\ ** Visual Studio 2017 Developer Command Prompt v15.9.14 ** Copyright (c) 2017 Microsoft Corporation ************************* [vcvarsall.bat] Environment initialized for: 'x86 Microsoft(R) Program Maintenance Utility Version 14.16.27032.1 Copyright (C) Microsoft Corporation. All rights reserved. | Iihk /NOLOGO /DLL /SUBSYSTEM:CONSOLE /DEF:xpcvcd||.def /Include:_malloc /MAP /DEBUG /IGNORE:4099 | C:\progra^\pmathcap ライブラリ xpcosc_example_slrt.lib とオブジェクト xpcosc_example_slrt.exp を作成中 ### Created DLL xpcosc_example_sirt.dll C:\PROGRA^1\MATLAB\PR2020a\toolbox\sIrt\target\thirdparty\OnTime\bin\minkusrdlm -c+ -q+ xpcosc_example_sIrt.dll ..\.\.\.\.\.\xpcosc_example RTTarget-32 DLM Processor 6.10 (c) 1996,2017 On Time Informatik GmbH ### Created DLM ..¥..¥xpcosc_example.dlm ### Invoking custom build hook: CodeGenAfterMake ### Successful completion of build procedure for: xpcosc_example

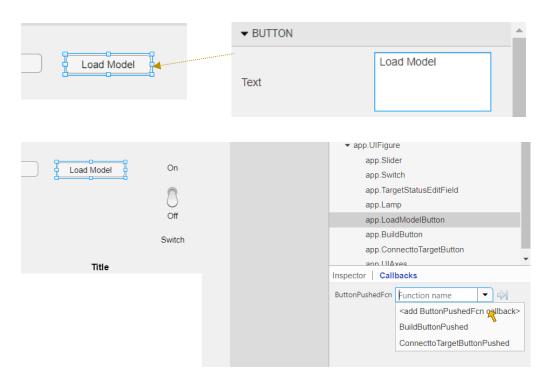
また下図のようにリアルタイムアプリケーション xpcosc. mldatx が生成されます。





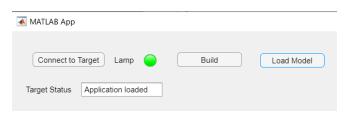
8-4-5 リアルタイムアプリケーションのロード

ビルドで生成されたリアルタイムアプリケーションをロードできるようにします。 最後のボタンの名称を変更し、コールバック関数を作成します。



作成されたコールバック関数 LoadModelButtonPushed にリアルタイムアプリケーションをロードするためのコードを追加します。

正常にロードできた場合、下記のように表示されます。

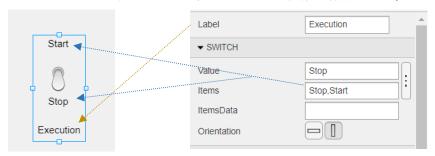


Target screen 上にもリアルタイムアプリケーションがロードされたと表示されます。



8-4-6 リアルタイムアプリケーションの実行

Target computer ヘロードしたリアルタイムアプリケーションを開始・停止できるようにします。 トグルスイッチの名称を変更し、コールバック関数を作成します。





作成されたコールバック関数 ExecutionSwitchValueChanged にリアルタイムアプリケーションを開始・停止するためのコードを追加します。

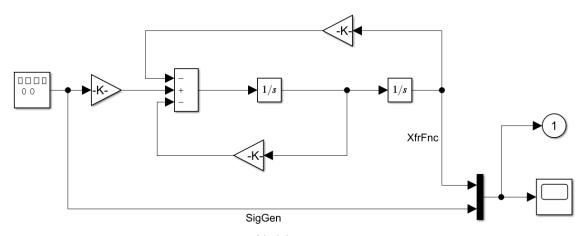
正常に開始できた場合、Target screen 上の Execution にリアルタイムアプリケーションを実行している時間が表示されます。



8-4-7 信号の表示

Simulink モデルのブロック線図上の信号線の値を表示できるようにします。

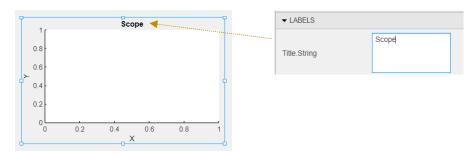
今回は下図の Signal Generator と Integrator1 ブロックの出力 (SigGen と XfrFnc) を表示します。



Model xpcosc Simulink Real-Time example model

Copyright 1999-2013 The MathWorks, Inc.

信号ラインの値は作成しておいた Axes に表示します。 Axes のタイトル名称を変更しておきます。



次に Axes に表示するデータが格納される Host Scope を作成します。



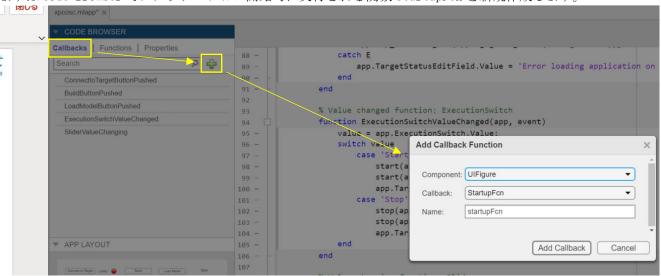
リアルタイムアプリケーションのロード時に、Host Spope の設定をまとめて行うコードを追加します。

```
% Button pushed function: LoadModelButton
function LoadModelButtonPushed(app, event)
app.TargetStatusEditField.Value = 'Loading application...';
try
    load(app.tg, app.modelName);

app.TargetStatusEditField.Value = 'Application loaded';

    % Add a host scope and add signals to log
    app.scp_01 = addscope(app.tg, 'host');
    app.scp_01.Decimation = 1;
    app.scp_01.TriggerMode = 'FreeRun';
    app.scp_01.NumSamples = app.sampSize;
    app.scp_01.addsignal(app.tg.getsignalid('Signal Generator'));
    app.scp_01.addsignal(app.tg.getsignalid('Integrator1'));
catch E
    app.TargetStatusEditField.Value = 'Error loading application on target.';
end
```

次に Host Spope で取得した信号線のデータを周期的に Axes で表示するためのタイマーを追加します。 まずは Code Browser でアプリケーション開始時に実行される関数 StartupFcn を新規作成します。

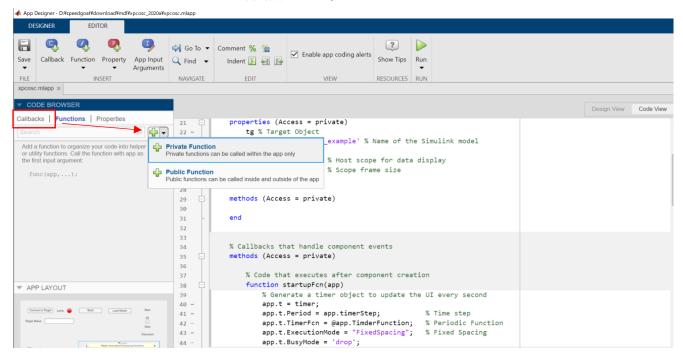


StartupFcn にタイマーを作成するコードを追加します。 追加したコードにより周期的に関数 TimerFunction を実行します。



関数 TimerFunction を新規作成します。

Cord Browser で Private Function を新規作成します。



新規作成した Private Function の名称を TimerFunction へ変更します。

```
function results = TimerFunction(app,~,~)
end
```

TimerFunction にコードを追加します。

このコードにより、Host Scope から信号線のデータや経過時間を取得し、それを Axes に反映させます。

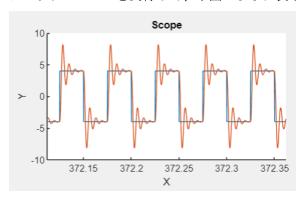
```
function results = TimerFunction(app,~,~)
    % Get data from host scope and plot in the graph
    if strcmp(app.scp_01.Status, 'Finished')
        % Update the plot buffer with the new host scope data chunk
        app.plotTime = app.scp_01.Time;
        app.plotData = app.scp_01.Data;
        % Restart the scope
        app.scp_01.start;
        % Update time axis limits
        app.UIAxes.XLim = [app.plotTime(1), app.plotTime(end)];
        % Plot the new buffered data
        plot(app.UIAxes, app.plotTime, app.plotData);
        legend(app.UIAxes, 'SigGen', 'XfrFnc', 'Location', 'Northeast');
end
end
```

最後に Host Scope と Timer を開始するコードを追加します。

```
% Value changed function: ExecutionSwitch
function ExecutionSwitchValueChanged(app, event)
    value = app.ExecutionSwitch.Value;
switch value
        case 'Start'
           start(app.tg);
                               % Start real-time application
            start(app.t);
                               % Start timer
            start(app.scp_01); % Start scope
            app.TargetStatusEditField.Value = 'Application running';
        case 'Stop'
                               % Stop real-time application
            stop(app.tg);
            stop(app.t);
                               % Stop timer
            stop(app.scp_01);
                               % Stop scope
            app.TargetStatusEditField.Value = 'Application stopped';
    end
```



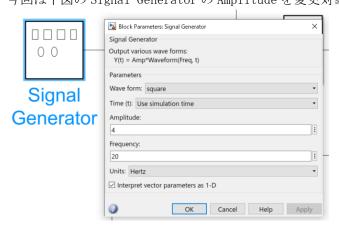
アプリケーションを実行して、下図のように表示されれば正常に動作しています。





8-4-8 パラメータの設定

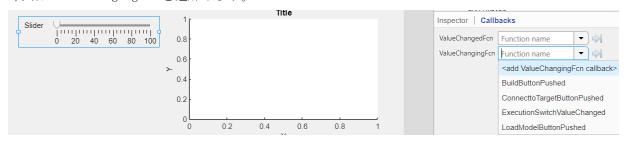
Simulink モデルのブロックのパラメータを変更できるようにします。 今回は下図の Signal Generator の Amplitude を変更対象とします。



まずはSliderのコールバック関数を追加します。

Slider にはふたつのイベントにコールバック関数を設定できます。

今回は ValueChangingFcn を追加します。



Amplitude を設定するためのコードを追加します。

```
% Value changing function: Slider
function SliderValueChanging(app, event)
   changingValue = event.Value;
   app.tg.setparam('Signal Generator', 'Amplitude', changingValue);
end
```

アプリケーションを実行し、スライダーを操作してください。 スライダーの値に応じて、Axes の縦軸の幅が変動すれば正常に動作しています。

